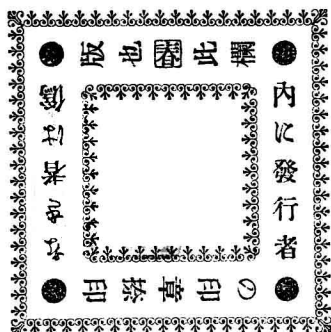


金色夜叉

後
編

著 作 權 有 所



明治三十二年十二月廿九日印刷
同 三十三年一月一日發行

著 者

尾崎徳太郎

發 行 者

和田 光 次

印 刷 者

星野 諤次郎

發 行 所

春 陽 堂

印 刷 所

東京印刷株式會社

電話浪花二千三百二十五番

金色夜叉後編

前編 實價金六拾錢
中編 實價金四拾錢
後編 實價金四拾錢

後編
金色夜叉

紅葉山人

(壹)

翌々日の諸新聞は坂町に於ける高利貸遭難の一件を報道せり。中に間貫一を誤りて鰐淵直行と爲るもありしが、負傷者は翌日大學第二醫院に入院したりとのみは、一樣に事實の眞を傳ふるなりけり。然れど其人を誤れる報道は決して何等の不都合をも生ぜざるべし。彼等を識らざる讀者は湯屋の喧嘩も同じく三面記事の常套として看過すべく、何の遑か其の敵手の誰々なるを問はん。識れる者は恐くは貫一も鰐淵も一つに足腰の利かずなるまで撃踏されざりしを本意無く思へるなるべし。又或者は彼の即死せざりしをも物足らず覺ゆるなるべし。下手人は不明なれども、察するに貸借上の遺趣より爲せ

る業ならんとは、諸新聞の記せる如く、人も皆思ふ所なりけり。直行は今朝病院へ見舞に行きて、妻は患者の容體を案じつゝ留守せるなり。夫婦は心を協せて貫一の災難を悲み、何程の費をも吝まず手宛の限を加へて、少小の瘕をも遺さざらんと祈るなりき。

股肱と恃み、我子とも思へる貫一の遭難を、主人はなか／＼其身に受けし闇打のやうに覺えて、無念の止み難く、かばかりの事に屈する鰐淵ならぬ令見の爲に、彼が入院中を目覺しくも厚く賄ひて、再び手出しもならざらんやう、陰ながら卑怯者の息の根を遏めんと、氣も狂はしく力を竭せり。

彼の妻は又旋ては怆る不慮の事の夫の身にも出来るべきを思過して、若し然るべからんには如何にか爲べき、此の悲さ、此の口惜さ、此の心細さにては止まじと思ふに就けて、空可恐く

胸の打騒ぐを禁め得ず奉公大事ゆゑに怨を結びて、憂き目に遭ひし貫一は、夫の禍を轉じて身の仇とせし可憫さを、日比の手柄に増して浸々難有く、彼を念ひ、此を思ひて、絶に心弱くのみ成行くほどに、裏に愧づること、懼るること、疚きことなどの常に抑へたるが、忽ち涌立ち、跳出で、其身を責むる痛苦に堪へざるなりき。

年久しく飼るゝ老猫の凡そ子狗ほどなるが棄てたる雪の塊のやうに長火鉢の猫板の上に蹲りて、前足の隻落して爪頭の灰に埋るゝをも知らず、駒をさへ掻きて熟睡したり。妻は其夜の騷擾次の日の氣勞に、血の道を惱める心地にて、憎々となりては驚かされつゝありける耳元に、格子の鐸の轟きければ、はや夫の歸來かと疑ひも果てぬに、紙門を開きて顯せる姿は、年紀二十六七と見えて、身材は高からず、色や蒼き瘦顔の險し

げに口髭逞しく、髪が生ひ亂れたるに深々と紺子ルトンの二重外套の襟を立て、黒の中折帽は脱ぎて手にしつ。高き鼻に龍甲縁の目鏡を挟みて、稜ある眼色は見る物毎に恨あるが如し。

妻は思設けぬ面色の中に喜を漾へて、

「まあ直道かい、好くね出だね。」

片隅に外套を脱捨つれば、彼は黒綾のモオニングの新しからぬに、濃納戸地に黒縞の窄袴の寛なるを着けて清ならぬ謨護のカラ、カフ鼠色の紋縹子の頸飾したり。妻は得々起ちて、其外套を柱の折釘に懸けつ。

どうも取んだ事で、阿父さんの様子は甚麼？今朝新聞を見る
と愕いて飛んで來たのです。容體は奈何です。」

彼は時儀を叙ぶるに迫らずして忙しげに慙く問出でぬ。

「あゝ新聞で、然だつたかい。何有阿父さんは奈何も作りはしないわね。」

「はあ？ 坂町で大怪我を爲つて、病院へ入つたと云ふのは？」
「那は間さ。阿父さんだと思ひなの？ 可厭だね、奈何したと云ふのだらう。」

「いや、然ですか。でも、新聞には歴然と然う出て居ましたよ。」

「それぢや其の新聞が違つて居るのだよ。阿父さんは先之病院へ見舞にお出掛だから、間も無くお歸來だらう。まあ寛々しておいな。」

「恁と聞ける直道は餘の不意に拍子抜して、喜びも得爲ず啞然たるのみ。」

「あゝ、然ですか、間が遣られたのですか。」

「あゝ、間が可哀さうにねえ、取んだ災難で、大怪我をしたのだよ。」

「甚麼で、新聞には餘程劇いやうに出て居ましたが。」

「新聞に在る通だけれど、不具になるやうな事も無いさうだが、全然快くなるには三月ぐらゐは甚麼事をしてても要るといふ話だよ。誠に氣の毒な、それで、阿父さんも大抵な心配ぢやないの。まあ、ね、病院も上等へ入れて手宛は十分にしているのだから、決して氣遣は無いやうなものだけれど、何しろ大怪我だからね。左の肩の骨が少し摧けたとかで、手が緩縦になつて了つたの。其外紫色の痣だの、蚯蚓腫だの、打切れたり、擦毀したやうな負傷は、お前體一面なのさ。うれに氣絶するほど頭部を撲れたのだから、腦病でも出なければ可いつて、お醫者様も然う言つてお在ださうだけれど、今の所では那樣鹽梅も無いさうだよ。何しろ其晩内へ昇込んだ時は半死半生で、些の虫の息が通つて居るばかり、私は一目見ると、是は逆も助るまいと思つた

けれど、割合に人間といふものは丈夫なものだね。」

「それは災難な、氣の毒な事をしましたな。まあ十分に手宛をして遣るが可いです。而して阿父さんは何と言つて居ました。」

「何とくは？」

「間が闇打にされた事を。」

「いづれ敵手は貸金の事から遺趣を持つて、其の悔し紛に無法な真似をしたのだらうつて、大相腹を立てゝお在なのだよ。全くね、間は那云ふ不斷の大人しい人だから、詰らない喧嘩なぐを爲る氣遣はなし、何でも其に違は無いのさ。うれだから猶更氣の毒で、何とも諷ひやうが無い。」

「間は若いから、うれでも助るのです、阿父さんであつたら命は有りませんよ、阿母さん。」

「まあ不厭なことをお言ひでないな！」

浸々思入りたりし直道は徐に其の恨めしき目を擧げて、
「阿母さん、阿父さんは未だ此家業をお廢めなさる様子は無い
のですかね。」

母は苦しげに鈍りくへて、

「然ねえ……別に何とも……私には能く解らないね……」

「もう今に應報は阿父さんにも……。阿母さん、間が那麼目に
遭つたのは、決して人事ぢやありませんよ。」

「お前又阿父さんの前で那樣事をお言ひでないよ。」

「言ひます！ 今日は是非言はなければならぬ。」

「それは言ふも可いけれど、從來も随分お言ひだけれど、那の氣
性だから阿父さんは些もお聴きではないぢやないか。逆も他
の言ふことなんぢは聴かない人なのだから、まあ、もう少しお
前も目を瞑つてお在よよ。」

「私だつて親に向つて言ひたくはありません。大概の事なら目を瞑つて居たいのだけれど、實に是ばかりは目を瞑つて居られないのですから。始終然う思ひます、私は外に何も苦勞といふものは無い、唯是だけが苦勞で、考出すと夜も寐られないのです。外に甚麼苦勞が在つても可いから、どうか此苦勞だけは没して、了ひたいと熱く思ふのです。唉、這麼事なら未だ親子で乞食をした方が、復に可い。」

彼は涙を浮べて俯きぬ。母は其身も俱に責めらるゝ想して、或は可慚く、或は可忌く、此の苦しき位置に在るに堪へかねつゝ、言解かん術さへ無けれど、左にも右にも言はで已むべき折ならねば、辛じて打出しつ。

「其はもうお前の言ふのは尤だけれど、お前と阿父さんとは全で氣合が違ふのだから、萬事考量が別々で、お前の言ふ事は阿

父さんの肚には入らず、ね、又阿父さんの爲る事はお前には不承知と謂ふので、其中へ入つて私も困るわね。内も今では相應にお財も出来たのだから、慇云ふ家業は廢めて、樂隠居になつて、お前に嫁を貰つて、孫の顔でも見たい、と然う思ふのだけれど、那云ふ氣の阿父さんから、那樣ことを言出さうものなら、甚麼に慍られるだらうと、それが見え透いて居るから、漫然した事は言はれずさ、お前の心を察して見れば、可哀さうではあり、然かと云つて何方を奈何することも出来ず、陰で心配するばかりで、何の役にも立たないながら、これでなか／＼苦しいのは私の身だよ。

然がお前は氣も濟まなからうけれど、逆も今の處では何と言つた所が應と承知をしさうな様子は無いのだから、懃ひ言合つてお互に心持を悪くするのが果だから、……それは、お前、

何と云つたつて親一人子一人の中だもの、阿父さんだつて心ぢや甚麼にお前が便だか知れやしないのだから、究竟はお前の言ふ事も聴くのは知れて居るのだし、阿父さんだつて現在の子の那樣にまで思つて居るのを、決して心に掛けないのではないけれども、又阿父さんの方にも其處には了簡があつて、一概にお前の言ふ通にも成りかねるのだらう。

それに今日あたりは、間の事で大變氣が立つて居る所だから、お前が何か言ふと却つて善くないから、今日は窃として措いておくれ、よ、本當に私が頼むから、ねえ直道。

實に母は自ら言へりし如く、板挾の難局に立てるなれば、唯管事あらせじと、誠の一圖に直道を諭すなりき。彼は涙の催すに堪へずして、鼻目鏡を取捨てゝ目を推拭ひつゝ、猶咽び居たりしが、

「阿母さんに然う言れるから、私は不斷は忪へて居るのです、今日ばかり存分に言はして下さい。今日言はなかつたら言ふ時は有りませんよ。間の那樣目に遭つたのは天罰です、此天罰は阿父さんも今に免れんことは知れて居るから、言ふのなら、今言はんくらぬなら、私はもう一生言ひません。」

母は其の一念に脅されけんやうにて漫寒きを覺えたり。洩打かみて直道は語を繼ぎぬ。

然し私の仕打も善くはありません、阿父さんの方にも言分は有らうと、それは自分で思つて居ます。阿父さんの家業が氣に入らん、意見をもしても用ない、這麼汚れた家業を爲るのを見て居るのが可厭だ、と親を棄てゝ別居して居ると云ふのは、如何にも情合の無い話で、實に私も心苦しいのです。決して人の子たる道ではない、然らず不孝者と阿父さん始阿母さんも然う思

つてお在でせう。」

「然^{さう}は思^{おも}ひはしないよ。お前^{まへ}の方^{かた}にも理^りはあるのだから然^{さう}は思^{おも}ひはしないけれど、一處^{いっしょ}に居^いたら然^さず好^よからうとは……………」。

「それは私^{わたし}は猶^{なほ}の事^{こと}です。這^{こん}麼^{んな}内^{うち}に居^いるのは可^い厭^やだ、別^{べつ}居^いして獨^{ひとり}で遣^やると我^{わが}儘^{まま}を言^いつて、何^{なん}なり恚^{いか}なり自^{みづか}分で暮^くして行^いけるのも、それまでに教^{けう}育^{いく}して貰^{もら}つたのは誰^{たれ}のお蔭^{かげ}かと謂^いへば、皆^{みな}親^{おや}の恩^{おん}。其^{これ}も是^{これ}も知^しつて居^いながら、阿^あ父^ふさん^{さん}を踏^ふ付^{つけ}にしたやうな行^いを爲^なすのは、阿^あ母^ぼさん^{さん}能^{よく}々の事^{こと}だと思^{おも}つて下^{くだ}さい。私^{わたし}は親^{おや}に忤^{さか}ふのぢやない、阿^あ父^ふさん^{さん}と一處^{いっしょ}に居^いるのを嫌^{きら}ふのぢやないが、私^{わたし}は金^{かね}貸^かなどゝ云^いふ賤^{いやし}い家^{いへ}業^{ぎやう}が大^{だい}嫌^{きら}なのです。人^{ひと}を惱^{なや}めて己^{おのれ}を肥^こす——淺^{あさ}しい家^{いへ}業^{ぎやう}です！」

身^みを顛^{よる}はして彼^{かれ}は涙^{なみだ}に掻^かき昏^くれたり。母^{はは}は居^い久^{ひさ}らぬまでに惑^{まど}へるなり。

親を過すほどの藝も無くて生意氣な事ばかり言つて實は面目も無いのです。然し不自由を辛抱してさへ下されば、兩親ぐらゐに乾もじい思は屹と爲せませんから、破屋でも可いから親子三人一所に暮して、人に後指を差れず、罪も作らず、怨も受けずに清く暮したいぢやありませんか。世の中は貨が有つたから、それで可い譯のものがありませんよ。まして非道をしてお拵へた貨、那樣貨が何の頼になるものですか、必ず惡錢身に附かずです。無理に仕上げた身上は一代持たずに滅びます。因果の報う例は恐るべきものだから、一日でも早く這塵家業は廢めるに越した事はありません。唉、末が見えて居るのに、情無い事ですなあ！」

積惡の應報、顛面の末を憂ひて措かざる直道が心の眼は、無殘にも怨の刃に劈れて、路上に横死の恥を暴せる父が死顔の、犬